北村山のおいしい米づくり情報　　令和７年４月９日 発行

稲作だより　～第２号　育苗編～

浸種の水温は 12℃以上、15℃未満で！
催芽は、あせらず芽切れを確認！

1　浸種の水温は「12℃以上 15℃未満」

浸種開始時の水温が低いと、催芽時の芽切れが不揃いになり、発芽勢も劣ります。
一方、水温が 15℃を超えるとばか苗病菌が増えやすくなります。
浸種中は**水温が 12 度以上 15℃未満**となっているか、温度計で確認しましょう。
積算水温は品種ごとの目安を参考にして十分給水するように管理します。

浸種期間の目安

品　　種　　名	積算水温	浸種日数 水温１２℃
はえぬき、つや姫、雪若丸、あきたこまち ひとめぼれ、コシヒカリ	１２０℃	１０日
ササニシキ、ヒメノモチ、こゆきもち	１００℃	９日

2　催芽は「ハト胸状態」になるまで

○催芽の適温は 30～32℃です。
　芽と根が１㎜出た状態（ハト胸状態）まで催芽を行いましょう。
○芽切れしないまま播種すると、出芽揃いが悪くなり、健苗育成が難しくなります。必ず、しっかり芽切れしていることを確認してから、播種作業に入りましょう。
○「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、酒造好適米は休眠が深くなりやすいので、芽切れをしっかり確認しましょう。
　「ヒメノモチ」は芽が伸びやすいので伸ばしすぎに注意します。

3　苗種に合わせて適正な播種量

○下記の播種量（乾籾換算）の目安を参考に適切な播種量で播種を行いましょう。
　播種量が多すぎると、軟弱徒長苗の原因になります。

播種量(乾籾換算)の目安

苗種	播種量 (乾籾g/箱)	育苗日数 (日)	移植適期 (枚)
中苗	80～120	30～35	3.5
稚苗	150～180	20～25	2.5
高密度播種苗	250	15	2.0

適切な育苗日数で移植できるよう作業計画を立てましょう。
播種時には床土に十分冠水しましょう。

4　出芽～緑化期の温度管理

○４～５月の高温が予報されています！
○施設内の温度上昇による高温障害（ヤケ）に注意しましょう。
○晴天日は、外気が肌寒くても閉め切ったハウス内はすぐに高温になります。施設内の温度（特に苗箱付近）を確認し、朝８時までに換気しましょう。
◇温度管理の目安（出芽～１．５葉期）

稚苗育苗（育苗器で出芽する場合）		中苗育苗（無加温で出芽する場合）	
出芽期（２日間）	30～32℃	出芽揃いまで	20℃以上
緑化期（３日間）	昼間 20～25℃　夜間 10℃以上	出芽期～1.5葉期	昼間 30℃以下　夜間 10℃以上

○無加温出芽の場合、出芽揃いまで保温資材を活用し、適正な温度を確保しましょう。
○出芽後は、直射日光を避けながら徐々に緑化させます。
※被覆用の資材毎に遮光率、保湿性、保温性が異なるので、注意が必要です！
○プール育苗は、苗が伸びやすいため、積極的に換気して温度を上げ過ぎないようにしましょう！

5　育苗期間中の水管理　«適切なかん水で徒長を回避！»

○かん水は１日１回、朝にたっぷりと行いましょう。一見、乾いているように見えても、夕方に苗の葉先に水滴がついている場合は、かん水する必要はありません。
○朝にかん水した後、万一乾いてかん水する場合には、昼ごろに行いましょう。
○低温時や夕方のかん水は、床土の温度が下がるとともに根が酸素不足になるなど、根張り不良の原因となります。
○プール育苗では、苗が 1.5 葉以上になったことを確認して箱の高さまで入水しましょう。これ以降は、生育に応じて水を張る高さを上げていきます。

6　病害予防～ばか苗病・籾枯れ細菌病に注意～

ばか苗病

○浸種中の水温が 15℃以上になると感染リスクが高くなるので、水温の上がりやすいハウス内や直射日光の当たる場所での浸種は避け、適正な水温で浸種します。
○催芽温度は 30～32℃とし、長時間の催芽は避けましょう。
○生籾殻、わらなどは伝染源となるため、育苗施設周辺への放置は厳禁です。

籾枯れ細菌病

○発病後の治療効果がある薬剤がないため、種子消毒の防除が基本となります。
○催芽・出芽時の高温は感染を助長するため、特に温度管理に注意しましょう。
○育苗期間中は 25℃以上の高温とならないように適切な温度管理に努めます。
○発病が見られた苗は本田に持ち込まず、適切に処分しましょう。

☆春の農作業事故防止啓発運動展開中（4月1日～6月10日）
あせらず、ゆとりを持って農作業をしましょう。周囲の方にも、声掛けを！

【発行】　村山総合支庁北村山農業技術普及課　TEL0237-47-8634、8635、8636